

実技講座

鑑賞することで表現が豊かになり、制作することで観る目が養う。

講師の作品に対する想いを聞き、様々な作品を鑑賞することで制作する楽しみを深める。

この2点をテーマに掲げ、年間5本の実技講座が開催された。

「新収蔵品展」関連普及事業

リトグラフの実技講座

日 時 = 平成15年4月12日・13日・26日・27日
10:15~16:15

講 師 = 村上暁子 (銅版画家)

場 所 = 当館実技室・展示室

参加者数 = 27名

まず新収蔵品のルーセルのリトグラフ作品、伊藤勉黄の木版画、ピラネージの銅版画、浮世絵を鑑賞し、講師にそれぞれの作品の良さや特徴を解説していただいた。

ルーセルの作品は、リトグラフらしい柔らかく自由な描き込みを重ねて、軽やかな空気感を表現している。その良さを自分の作品に取り入れる試みをされた参加者が多数いた。

また今回は、2版~4版程度の多版多色摺りもテーマのひとつに付け加えられた。参加者は色の組み合わせ方や、インクの調合などに苦心していた。

「館蔵名品選」関連普及事業

シルクスクリーンの実技講座

日 時 = 平成15年6月7日・8日・14日・15日
10:15~16:15

講 師 = 内山久子 (当館チーフインストラクター)

場 所 = 当館実技室・展示室

参加者数 = 50名

最初に展示室に行き、木下佳通代・野田哲也のシルクスクリーンを鑑賞し、講師にそれぞれの作品の良さや特徴を解説していただいた。

木下佳通代の作品は、1枚の写真を認識していく過程を、17枚にマーキングによって示差し、時間を表面化・視覚化することによって観る者が何気なく行っている作業を投げ返し、問い返すという、当時のコンセプト・アートの影響が窺える作品。参加者の中には、このコンセプト・アートの制作姿勢を取り入れ、自分の姿をミジンコに例え、その姿がやせていく過程を表し、自分の体重減量表を制作された方がいた。

また、シルクスクリーンは様々な支持体に摺ることが出来る特徴がある。参加者は、傘・箱・時計の文字盤・アクリル板・ティーシャツなど、様々な素材を使った作品制作に挑戦していた。

「浮世絵風景画名品展」関連普及事業

木版画の実技講座

日 時 = 平成15年11月8日・9日
10:15~16:15

講 師 = 林美紀子 (木版画家)

場 所 = 当館実技室・展示室

参加者数 = 26名

木版画は古くから日本人に親しまれてきた版種である。それは日本人と木の結びつきの強さに関係があるのではないかと。講師の林美紀子氏は、油絵から木版画に転向されて20年になる。新潟で生まれ育った講師の家は材木商を営んでおり、小さい頃から木と触れ合いながら育ったと聞いた。講座は、参加者と木版画のつながりを語る自己紹介から始まった。

参加者は久しぶりに版木と向かい合う方から定期的に制作されている方まで幅があったが、講師のアドバイスを素直に受け止めそれぞれの作品に取り組んでいた。

お年玉付き年賀はがきの発売日を数日後に控えた週末の2日間で、カードや年賀状など2版から6版の作品を刷り上げた。短時間ではあったが、浮世絵作品のぼかしや摺り重ねの技術を取り入れた作品づくりに集中して取り組んでいた。



リトグラフの実技講座 参加者と講師 (右側)

実技講座

「ローマ散策PartⅡ」関連普及事業
銅版画の実技講座

日 時 = 平成16年2月1日・7日・8日
10:15~16:15

講 師 = 柳本一英 (版画家)
場 所 = 当館実技室・展示室
参加者数 = 45名

展覧会の鑑賞を通してピラネージの作風を学び、その模写を通して今後の銅版画制作のヒントを掴む実技講座を開催した。

「ローマは一日にして成らず」ピラネージが引いた描画の一本一本を丹念に描き写すため、参加者は何度も展示室へ足を運び、作品に目を凝らす。そしてピラネージがその一筆一筆に込めた想いを探る。

プレス機を通さないと作品の出来が解らないのが版画の醍醐味。「あー、ピラネージだ。」この一瞬を体験するためにどんなに頑張ってきたか、そんな思いが零れた一言であった。

「富士山の絵画」関連普及事業
日本画の実技講座

日 時 = 平成15年3月6日・7日・13日・14日
10:15~16:15

講 師 = 三宅太郎 (日本画家)
場 所 = 当館実技室・展示室
参加者数 = 61名

本格的な日本画の制作には、長い修練と制作日数がかかる。参加者のほとんどが初心者であること、開催日数が4日間であることを考え、簡易的な方法で富士山を描く日本画の実技講座を開催した。

使用した画材は、チューブ入りの絵の具 (水干絵の具を練ったもの・膠入り)、F6サイズの麻紙ボード (厚紙に麻紙をはってドーサ引きを済ませた画紙)。スケッチ・下絵・転写・骨描き・彩色という基本的な日本画の制作手順は踏んでいくが、紙をパネル張りする・ドーサ引きをする・膠、胡粉を溶く、絵の具を作るといった本格的な日本画の制作に必要な手順は省いた。

最初は水彩画と日本画の描き方の違いに戸惑う参加者もいたが、何色かを薄く塗り重ね、色の深みと奥行きを出していく日本画の描き方に徐々に慣れ、参加者それぞれが「私の富士」を表現することができた。

技法セミナー

「生きるの人」鈴木貴博 講演会
静岡New Art「わたしの居場所」展関連事業

日 時 = 平成15年4月19日
14:00~16:00

講 師 = 鈴木貴博
場 所 = 当館実技室
参加者数 = 20名

「生きるの人」と呼ばれている現代美術家・鈴木貴博氏の講演と簡単なワークショップを行った。本講座は、一線で活躍されている作家を招いて、その造形技法について語っていただくものであるが、鈴木氏はその生き様そのものが、作品ともいうべき作家である。氏が世界各国で展開している「生きるプロジェクト」の体験談を聞き、その後、聴講者が自ら墨で半紙に「生きる」と書き、「生きる」ということをあらためて考え直す契機とした。静岡New Art展の関連イベントとして企画された。



日本画の実技講座 美術館の近くで富士山をスケッチする